

平成 30 年 8 月 30 日現在

機関番号：21502

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381057

研究課題名(和文) 言語による現実探求としての生活綴方

研究課題名(英文) The "Seikatsu-Tsuzurikata" (life composition) as a quest for reality with regard to language

研究代表者

安部 貴洋 (ABE, Takahiro)

山形県立米沢栄養大学・健康栄養学部・教授

研究者番号：50530143

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：近年、国分一太郎の生活綴方が言語による現実探求として評価されている。本研究では、国分一太郎の生活綴方の形成過程をとおして、次の点を明らかにした。

1. 言語による現実探求としての生活綴方の条件が村の子どもに共感する国分の資質にあるということ。2. 綴方教師としての資質である、国分の子どもへの共感が北方性教育運動において理論化されること。

研究成果の概要(英文)： In recent years, Kokubun-Ichitarou's "Seikatsu-Tsuzurikata" (life composition) has been considered a quest for reality with regard to language. The main findings and insights acquired through the formative process of the "Seikatsu-Tsuzurikata" can be summarized as follows:

1. Sympathy toward a child of a village makes a quest for reality with regard to language possible. 2. Kokubun clarified sympathy toward a child of a village in the "north educational movement (Hoppousei Kyouiku Undou)."

研究分野：教育学

キーワード：国分一太郎 生活綴方 北方性教育運動 メディア 現実探求

1. 研究開始当初の背景

近年、生活綴方が再評価されている。特に重要であるのは今井康雄による再評価である。今井は、『キーワード現代の教育学』(東京大学出版会、2009年)において新教育と生活綴方をともに〈言語=メディア〉観に立つものとして捉えている。〈言語=メディア〉観とは、言語を事物や観念につけられた記号として捉える〈言語=記号〉観に対して、言語を事物と観念の浸透する場として捉える見解である。〈言語=メディア〉観に立つとき、言語が世界構築の重要な要因として現れることになる。そして、新教育と生活綴方はともに〈言語=メディア〉観にたっているという。だが、新教育が主体の構築を目的としていたのに対して、生活綴方、特に1930年代の生活綴方は子ども自らによる世界の構築、現実探求を目的とする点において異なる。そして、生活綴方に主体構築への抵抗の可能性を今井は見ている。今井のこの見解は、生活綴方を〈言語=メディア〉観から問い直すばかりではない。これまで主として国語、作文教育の枠内で論じられてきた生活綴方を新教育等との関係において論じることを可能にし、さらに新教育以降の教育を模索する現在において重要な示唆を含んでいる。だが、これらの問題を今井はその後論じていないように思える。特に現実探求は子ども一人で行うわけではない。教師との関わりのなかで現実探求は行われる。もちろん、このことは主体構築も同様である。だとすれば、主体構築と現実探求とを隔てるのは言語を中心とした子どもと教師との関わりの相違にあるのではないか。この点も重要な問題となる。

これらの問題を本研究では国分一太郎(1911-1985)の生活綴方に関する理論と実践を手がかりに考察している。国分は、戦前は1930年代の生活綴方を代表する綴方教師として、戦後は生活綴方の立場から新教育を批判する教育評論家・批評家として知られている。言語による現実探求としての生活綴方を考察する上で重要な人物である。だが、国分一太郎の理論と実践に関する研究は必ずしも十分になされているわけではない。唯一体系的な研究として挙げることが出来るのが津田道夫『国分一太郎 抵抗としての生活綴方運動』(社会評論社、2010年)である。だが、津田の著作は主として政治的観点から捉えたものとなっている。また、国分の生活綴方に言及した著作や論文も見ることが出来るが、本研究のテーマと重なるものはない。

2. 研究の目的

このように、現在生活綴方に関して再評価がなされつつあるものの、そのための基礎的研究、特に国分一太郎に関する研究が十分ではない状況にある。そこで本研究では、〈言語=メディア〉観との関係から国分一太郎の生活綴方を考察することを目的とした。特に、同じ言語観に立ちつつも、主体構築を目的とする新教育やプロパガンダとの違いを明らかにすることにある。そのために本研究では、次の2点を明らかにすることを目的とした。まず、生活綴方に至るまでの国分の半生に着目する。国分の生活綴方が、どのように形成されたのかを明らかにすることで、言語による現実探求としての生活綴方がより明らかになると考えたからにほかならない。特に、国分の村の言葉と学校の言葉、そして子どもと村の大人、子どもと教師とのやりとりの違いを明らかにすることである。また1970年代以降の国分の理論と実践を考察することを目的とした。1970年代以降、生活綴方を支えてきた実在が失われることになる。だが、このような状況は言語による現実探求の実践により適した状況とも言うことができる。このような状況の中で国分の生活綴方はどのように展開するのか。言語による現実探求としての生活綴方の可能性を捉えるうえで重要な問題である。この点を考察することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では文献収集や関係者からの情報収集等を行ってきた。まず資料収集に関してはインターネット等を利用して関連書籍の購入、論文の入手、また山形県立図書館、山形県立博物館教育資料館、東根市にある国分一太郎資料収蔵室において文献収集を行った。関係者からの情報収集に関しては国分一太郎「教育」と「文学」研究会、日本作文の会、福島県作文の会、つづり方フォーラム等で行った。国分一太郎「教育」と「文学」研究会は、国分一太郎の親族、教え子、友人、弟子、そして研究者等によって構成されている。そのため文献では知ることのできない国分一太郎に関する情報を得ることができた。この会に参加することで国分が行った講演時の音声データ、晩年に横浜国立大学で行った「生活綴方と昭和教育史」に関する特別講義の映像を入手できた。また、福島県作文の会、日本作文の会、つづり方フォーラムに参加して生活綴方に関する幅広い情報を得ている。福島県作文の会は日本作文の会常任委員長の白木次男が代表を務めている。白木は北方性教育運動に学びながら自らも作文教育の実践を行ってきた。そして、つづり方フォーラムは国分の作文教育に学びながら実践を行っている。これらの会に参加することで、国分一太郎、生活綴方、さらには現代における生活綴方の実践に関する情報を得た。その後、収集した文献、情報を精査し、考察を進めた。

3. 研究の方法

4. 研究成果

本研究の成果は、まず言語による現実探求が可能となる条件のひとつを明らかにした点にある。その条件とは、国分の村の子どもに共感する姿勢にある。この姿勢が重要であるのは、子どもに共感する姿勢こそが主体構築を進めた。

4. 研究成果

本研究の成果は、まず言語による現実探求が可能となる条件のひとつを明らかにした点にある。その条件とは、国分の村の子どもに共感する姿勢にある。この姿勢が重要であるのは、子どもに共感する姿勢こそが主体構築を進めた。

築と現実探求とを隔てるからにはかならない。すでにみたように新教育も生活綴方もともに<メディア=言語>観にたっている。だが、新教育においては意図的に子供の世界が形成されるのに対して、1930年代の生活綴方においては子ども自身による世界の形成が目指されている。この相違を生み出しているのが、教師の子どもに共感する姿勢である。ここで共感とは子どものありのままを受け入れ、子どもの生活にとどまろうとする姿勢を意味する。このことは国分の生活綴方の指導に現れている。生活綴方の指導において国分は子どもの綴方の不十分な点を具体的に問いかけ詳しく書くように促すだけである。この問いかけを手がかりに子どもは詳しく書くようになる。これに対して新教育やプロパガンダにおいては言葉そのものが与えられることになる。子どもに共感する国分の姿勢こそが言語による現実探求の重要な条件としてある。これまでも綴方教師としての国分の資質が共感にあること、そしてその資質が国分の生まれ育った山形県村山地方の自然、三日町、そして国分を育ててきた祖母イシ、父藤太郎、母デンによって形成されてきたことは指摘されてきた。この問題を本研究では、言語による現実探求といった側面から考察し、村の子どもへの共感が言語による現実探求を可能にする条件であることを明らかにした。また、母デンとの関係に関してだが、国分に接する母デンにも共感する姿勢をみることができることを明らかにした。さらに「概念くだき」に限ってだが、村の子どもに共感する国分の資質が北方性教育運動において理論化されることを明らかにした。国分の村の子どもへの共感北方性教育運動において教師が子どものありのままを受けとめるリアリズムとして展開される。

本研究の意義は、そもそも研究が十分に進んでいない国分研究において基礎的な研究となる。特に、村の子どもに共感する姿勢は、国分の幼少期、戦前の綴方教師時代、そして戦後の教育評論家・批評家時代を統一的に捉えることを可能にする視点であるように思える。また、<メディア=言語>観から国分の生活綴方を捉えることによって、国分の生活綴方の問い直しのみならず、より広い枠組みで捉えることが可能となる。まず、北方性教育運動における国分の理論的变化を明らかにし、その後の生活綴方批判を異なる角度から考察することを可能にする。<メディア=言語>観からみると、北方性教育運動への関わりは、国分の言語観の変化をもたらしたのではなかったか。これまでの研究では、この問題が論じられることはほとんどなかった。そして、その変化が後に国分による生活綴方批判へと展開するのではないか。この点、心情的問題として捉えられることの多かった国分の生活綴方批判解釈への影響は大きいように思われる。また、国語教育、作文教育との関係で論じられることの多かった

国分の生活綴方をより広い枠組みのなかで論じることが可能となる。特に新教育との関係に関しては、新教育以降の教育が模索される現在においても重要な示唆を含んでいる。その一端を1970年代以降の国分の論考から人間綴方として考察した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

安部貴洋、国分一太郎の思想形成 綴方教師としての資質とその形成、教育思想、査読無、第45巻、2018、pp.27-40

安部貴洋、北方性教育運動に学ぶ/北方性教育運動を生きる、みやぎの保育、査読無、12号、2017、pp.52-58

安部貴洋、「概念くだき」にみる国分一太郎と北方性教育運動、「教育」と「文学」の研究、査読無、第6号、2017、pp.1-7

安部貴洋、生活綴方にとって子どもを知ること 国分一太郎の子ども理解と表現指導、教育思想、査読無、第42号、2015、pp.49-57

安部貴洋、国分一太郎における『綴方生活の影響』、「教育」と「文学」の研究、査読無、第4号、2015、pp.1-6

安部貴洋、生活綴方から人間綴方へ 国分一太郎と生活綴方の「現代」、「教育」と「文学」の研究、査読無、第3号、2014、pp.6

〔学会発表〕(計3件)

安部貴洋、国分一太郎の思想形成 立身出世主義と生活綴方、国分一太郎「教育」と「文学」研究会、2017

安部貴洋、「国分一太郎と北方性教育運動」研究における課題、国分一太郎「教育」と「文学」研究会、2017

安部貴洋、生活の風が吹きはじめる場所 母デンと生活綴方、国分一太郎「教育」と「文学」研究会、2014

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

安部貴洋、(分科会報告)田中定幸『『日本児童詩のはじまり』を今に生かす』、北にかいし枝なりき、No.14、2017、pp.3-4

安部貴洋、(図書案内)今井康雄『メディアの教育学 「教育」の再定義のために』(東京大学出版会、2004年)、底流、2016、p.4

安部貴洋、(講話)生活綴方における北方性、全国作文教育研究大会第8回実行委員会、2016

安部貴洋、(講話)北方性教育・生活綴方に学ぶ理論と実践、東北民教研・仙台保問研1月例会、2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安部 貴洋 (ABE Takahiro)

山形県立米沢栄養大学・健康栄養学部・教授

研究者番号: 50530143

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし